

多くの人が関わった味スタ

東日本大震災が発災し、味の素スタジアムが避難所になると発表されたのは3月17日でした。ボランティア希望者が急増し、まずはウェブサイトにからボランティア登録ができるようにしました。

受け入れ当初、食事や物資は自己調達、シャワーは使用不可など避難者の方々に不便を強いる面が多々ありました。地元自治会がおこなった炊き出しでも互いの考えが噛み合わず現場は混乱していました。そこで21日、東京都、調布市、社会福祉協議会などが話し合い、調布市被災者支援ボランティアセンターの開設を決定しました。

ピーク時には187名、合計430名、180世帯を受け入れました。ボランティアセンターを開設したのは受け入れから6日目。8日目に子どものプレイルーム設置、9日目にまちの情報マップの作成、10日目にリラクゼーションルーム、11日目に学習室と

中高生カフェ設置、13日目に住居相談の窓口開設など、次々にプログラムを立ち上げていきました。

実際に活動したボランティアは1日平均70〜80名、2ヶ月間で延べ1000人ほどになります。味スタ内の活動だけでなく、物資の提供や仕上げ、街頭募金にもご協力いただきました。

さまざまな形でさりげなく避難者の方々と関わることで、ニーズを把握しやすくなりました。たとえば学習室は、ボランティアが炊き出しのテントで聞いた母親の悩みから始まり、近隣の電気通信大学の先生と教職課程の学生を中心とした大学生チームに運営していただき大変好評でした。

避難所設置者の東京都とは対話を重ね協力し合うことで、食事の提供やシャワーの利用、洗濯機の設置、物資の提供など、目の前の人たちがどうしたら快適に過ごせるかということをご考えることができるようになりました。

「味スタ」から災害支援を考える

～調布市被災者支援ボランティアセンターの立ち上げの経緯とその運営

調布市社会福祉協議会 嵐祐子

*平成23年度「災害ボランティア・コーディネーター養成講座」(第2回)でお話いただいた内容をまとめています(主催:東京ボランティア・市民活動センター/開催:2011年6月30日)



メンバーなど、気軽に相談できる関係がありました。市役所との連携もさまざまな部署に及んでいたのが貸出用自転車の提供やゴミ回収など多くの協力をいただきました。

調整力や決断力も大切です。避難所は昼夜で状況が変わります。私たちは9〜23時頃まで味スタにいましたが、翌朝には何かが起こっている。激しい状況の変化に対応するための決断力が求められます。

そして、チームワークやチームビルディング。行政、中間支援組織、ボランティア、自治会など、さまざまな人が目的を理解し共有すること。また、冷静な判断力。思い入れが強いと周りが見えなくなります。私自身、急増するボランティア希望者にプログラムを用意しなくては、と考えてしまったことがありました。

メディアやITも活用しました。最初は取材を断っていましたが、誠実な報道も多く「ウェブサイトに秀逸」「活動

報告に気持ちが悪くもっている」などの評価をいただいたこともありました。「調布市民として誇りに思う」「社協やるなあ」という投稿があったのは、メディアの影響もあつたと思います。サイトのアクセス数は、6月30日現在、延べ14万件に上りました。

継続的な支援を

味スタは5月22日に閉鎖されましたが、私たちは被災地支援と調布に住む被災者の方々の支援を始めています。後者はおもに生活支援、孤立防止、ネットワークづくりをしています。また、そうした情報が被災者の方に行き届くよう携帯電話からもアクセスできるようにする予定です。同時に、この経験を今後にかさねるべく活動記録の作成も開始しました。

今回、登録していただいた2800余人のボランティアには、災害支援だけでなく、地域に関心を持っていたかどうか、調布の市民活動への参加もよびかけています。

日ごろのつながりが大切

ボランティアセンターを運営して感じたのは日ごろのつながりの大切さです。地元NPOや企業、青年会議所の